

# 寺院芸能としての仏舞の演出と機能

お茶の水女子大学 弓削田綾乃

## 1. 目的と対象

寺院の仏事において、人が仏に扮して舞う仏舞はどのような次第・演出で上演されるのだろうか。仏舞を構成する諸要素の詳細を調べることによって、総体的な演出意図および機能を考察する。この目的を果たすために、本研究では、宗教実践者らが主体となって遂行し、檀家らが仏事として参列する行事である京都府舞鶴市松尾寺の仏舞を事例とする。

## 2. 方法

松尾寺の仏舞を対象として、行事次第、舞台構造、動作、仮面、衣裳、持ち物等について分析し、演出を検討する。特に動作については、稽古のVTRと松尾寺に伝わる舞踊譜(1778年)をもとに、フレーズとポーズを抽出し、動作軌跡や手のポーズ、隊形移動等の諸要素について分析・解釈をおこなった。

## 3. 結果

### (1) 行事次第

京都府の日本海に面した舞鶴市の山寺、松尾寺(真言宗)で5月8日に釈迦如来の生誕を祝う「灌仏会」という法会が行われる。前夜に檀家が山を登って本堂にこもり、先祖供養のための御詠歌を和讃する。翌日の午後、大勢の檀家・信徒が集うなか、10人ほどの僧侶が読経し、仏の出現を祝す声明を奏す。そして本尊横の幕内から大日如来・釈迦如来・阿弥陀如来に扮した6名の演者が登場し、一列で進み、昼2畳分の舞台にあがって舞を舞う。

### (2) 舞台構造

本堂内部に設置された狭い空間であり、楽屋から舞台にあがるまでの移動、また楽屋に戻る移動を見せる構造になっている。

### (3) 動作

3種類の仏が登場し、それぞれ異なる動作を行う。体幹・頭はほとんど静の状態、下肢の動きも少ない。これは登場する3種の演者に相違はなく、移動のすり足以外はほぼ直立の姿勢を保つことをあらわしている。一方、上肢では相違がみられる。大日は静よりも動の状態が長く、釈迦は動と静がほぼ同じ、阿弥陀は動よりも静の状態が長い。手のポーズとして阿弥陀は手で5種類の印を結ぶが、大日と釈迦は楽器を演奏するジェスチャーをする。また、2列縦隊を45度ずつずらしているため、結果的に隊列は一周するが、わずかの歩行で済み、空間移動としての動きが少ない。

## (4) 仮面・衣裳・持ち物

登場する仏については、大日如来、釈迦如来、阿弥陀如来の3種とされるが、それが判別するのは、仮面につけられた梵字のみによってである。それ以外の色彩豊かで華美な造形は、一般的な図像表現における「菩薩」の身体的特徴と一致した。

衣裳には図像のイメージが認められるが、肌の露出がほとんどなく、舞人の個性はなくされる。大日と釈迦は、両手に楽器を持つ。これは図像のなかでも菩薩の形に近い。

## 4. 考察

### ・極楽世界のイメージの再現

動作は、体幹・下肢の動作が極力抑えられ、上肢が強調される。そのうち、楽器を奏するジェスチャーは、仏教の教義では如来の役割ではなく、菩薩・天人のものとされる。また、両手で「印」を結ぶのは、特に阿弥陀如来に多用される。この「印」は、仏教の教義で臨終の人間を極楽に導く意味を持っている。以上のことから、松尾寺の仏舞は、人間がイメージする極楽世界を表現していると考えられる。

### ・現実世界で仏と出会う演出

松尾寺の行事には、「死」にまつわる要素が多い。松尾の表現は、図画や経典などの「仏」の意匠にきわめて近い。狭い本堂の中、僧侶らによって法会が進められ、観衆の眼前にすえられた舞台で、金色を基調とした容色の仏が雅楽にあわせて抑制のきいた舞を舞う。三者三様の存在意義をもつ各如来の表現によって、死後の安泰というご利益を視聴覚に訴えると同時に、死を意識することによって現在の生を戒める役割を、この仏舞は担っていると考察される。そして、仏に現実世界で出会うことが松尾寺の仏舞の大きな目的であり、そのためには前夜のおこりに始まる諸行事の連綿とした演出が欠かせないと考える。

仏の現出の場面では、歩行が行われる。次に観衆との交感の場面では、舞が舞われる。最後のものと世界に返っていく場面では、再び歩行が行われる。一連の過程を見た人々は、今ここで、目の前に繰り広げられる「仏の来迎」と「仏との交感」に、仏の奇瑞、真の結縁を実感するのではないだろうか。

### ・演者への影響

一方、演じる側は、仏の仮面をつけ、全身を覆う衣裳をまとい、彩りのある装飾をほどこす。そして、曲線を描き、比較的緩やかで、静的な動作を反復する。視覚の狭窄、呼吸困難、閉塞感などの体感反応を誘引すると同時に、演者の個別の身体を隠し、「仏」という奉られる存在への変身を助ける精神的变化をもたらす舞踊と考える。